

おどりだす 富山



まちなか分析

まちなかを使いこなす力

富山市のまちなかでは、通りや広場などを利用したイベントが頻繁に行われている。また、年に一度行われる富山まつりでは、道路を利用するなど、富山の人々はまちを使いこなす力を持っている。



駅前でのイベント

グラウンドプラザでのイベント



道路でのイベント

富山まつり

コンセプト：富山のまちの魅力を引き出す新たな共同空間 "おどり場"

多様な主体が周辺に過ぎし、市内の中心に位置するなどまちへの波及効果の高い県庁周辺エリアを“おどり場”として整備する。その整備をきっかけにまちなかに点在する低未利用地や水辺、道路などにおどり場が広がることで、人の暮らしや活動が見えるようになり、さらに人々が協働して活動を起こし始める＝“おどりだす富山”を実現する。

“おどり場”とは

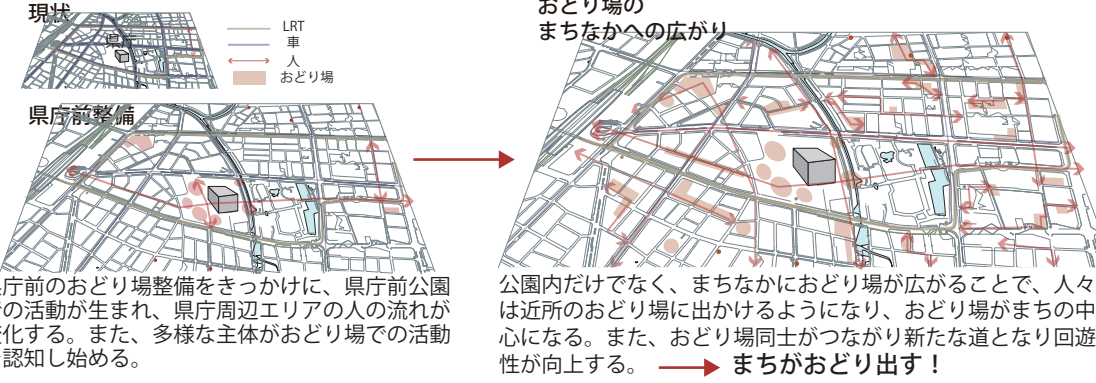
＝人々が協働し、まちを使ってやりたいことが実現できる場

踊り場の種類	“おどり場”の役割
1. 踊りを踊る場	a. やりたいことを実現する場(踊る)
2. 階段の踊り場	a. 憩う場(足を休める)
	b. 人と場所を結ぶ場(方向転換を行う)
	c. 人と人を結ぶ場(異なる方向を向いている人が出会う)

おどり場を支える仕組み



おどり出す富山の都市ビジョン



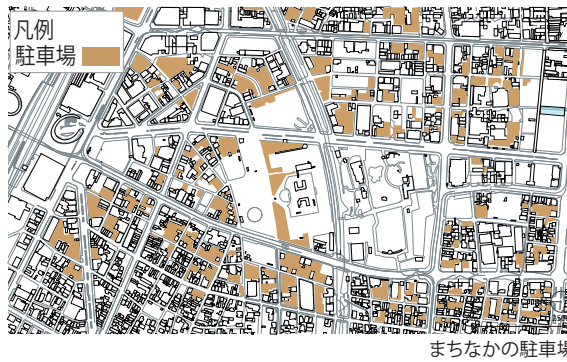
県庁前のおどり場整備をきっかけに、県庁前公園での活動が生まれ、県庁周辺エリアの人の流れが変化する。また、多様な主体がおどり場での活動を認知し始める。

公園内だけでなく、まちなかにおどり場が広がることで、人々は近所のおどり場に出かけるようになり、おどり場がまちの中心になる。また、おどり場同士がつながり新たな道となり回遊性が向上する。→ まちがおどり出す！

01 県庁周辺エリア分析

中心市街地の空洞化

まちなかをみると駐車場等の低未利用地が散見される。また、空き家も問題視されるなど、中心市街地の空洞化が起こっている。



駐車場や空き家などの低未利用地に加え、水辺、道路なども日常的に使いこなすことで、新たな暮らし方が実現できるのではないかと考える。

多様な主体が過ぎすエリア

東西のビジネス軸
元々県庁周辺エリアは神通川の本流が流れており、治水事業として埋め立て工事(馳越線工事)が実施され、官公庁や学校、近代的なビル街が建設された。そのため、現在でも県庁周辺エリアの周辺は、東西方向に公共施設や企業が多くなっている。

南北の生活軸
富山駅からグラウンドプラザのある商店街にかけては飲食店や住宅街があり、南北方向に生活の軸ができています。

県庁前公園の現状

県庁前公園は鬱蒼としていた木々や、滞留場所の不足により、通り抜ける場としての利用が多くなってしまっている。また、廃川の記憶として残された松川は、観光船や桜の名所として知られているものの、日常的には活用されていない。

県庁周辺エリアは周辺で多様な主体が過ぎしているため、日常的に活動できる整備を行うことで、まちへの波及効果を生み出すことができると考える。

02 おどり場の運営

『おどり場をまちなかに。県庁周辺からまちなかの魅力を向上させていく。』をスローガンにまちづくりを行う組織“カブ株式会社 TYM”を設立する。

カブ株式会社 TYM の仕組み

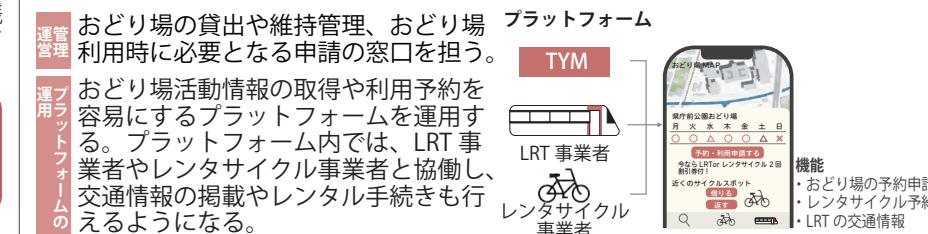
TYMのまちづくり事業に共感する地域の人は、カブ主として出資(カブの所有)ができる。カブ主はTYMの一員となり、まちづくりを自分事として考える感覚を持ち、行動するようになる。



TYMのまちづくり事業

I. おどり場利用者を増やす：プレイヤーの発掘、活用方法の提案
まちを使って何かしたい！と思ってもノウハウのないプレイヤーを見つけたり、プレイヤーからの相談にのり、おどり場活用の提案をする。

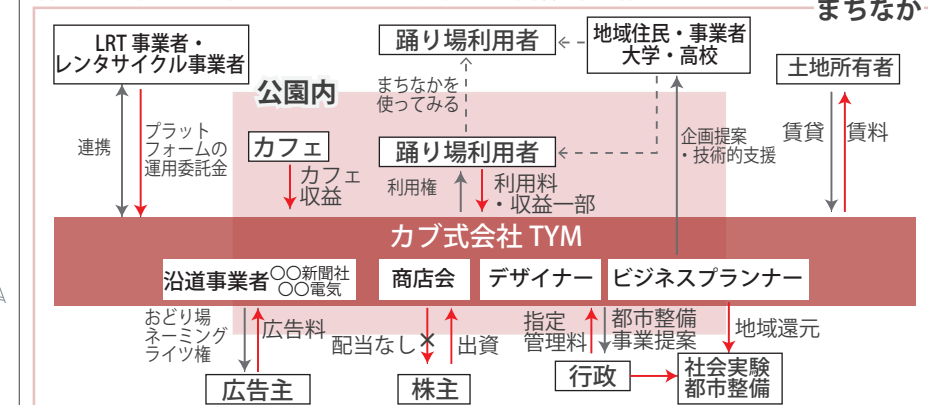
II. おどり場を使ってもらう：おどり場の管理運営・プラットフォームの運用



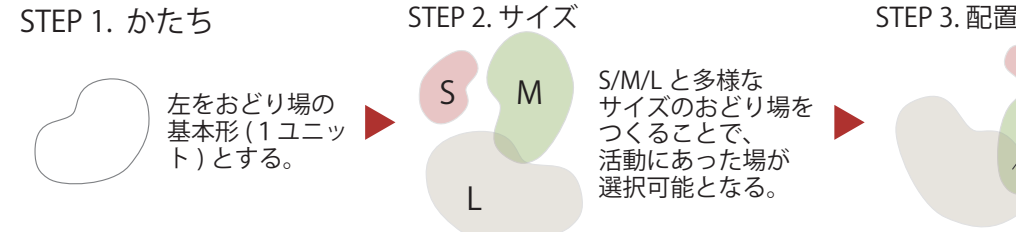
03

II. まちづくりの意見を集める：協議会の実施

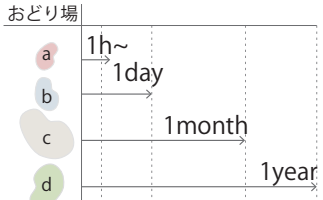
カブ主だけでなく、エリアを利用している市民・行政・事業者と協働し、まちなかを利用した活動を展開するための意見交換や連携体制を構築する。



県庁前公園をおどり場にする設計ダイアグラム



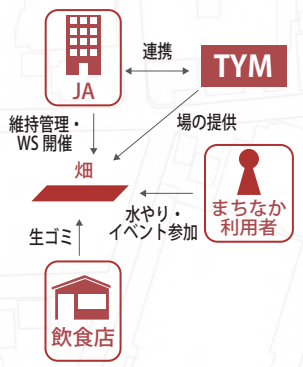
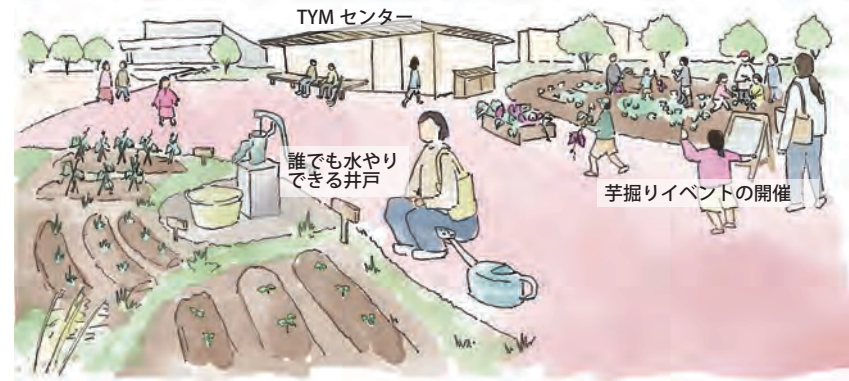
<おどり場整備後>



おどり場での活動期間は様々である。それぞれの時間軸を持つおどり場が点在することで、訪れるたびに変化が現れる。

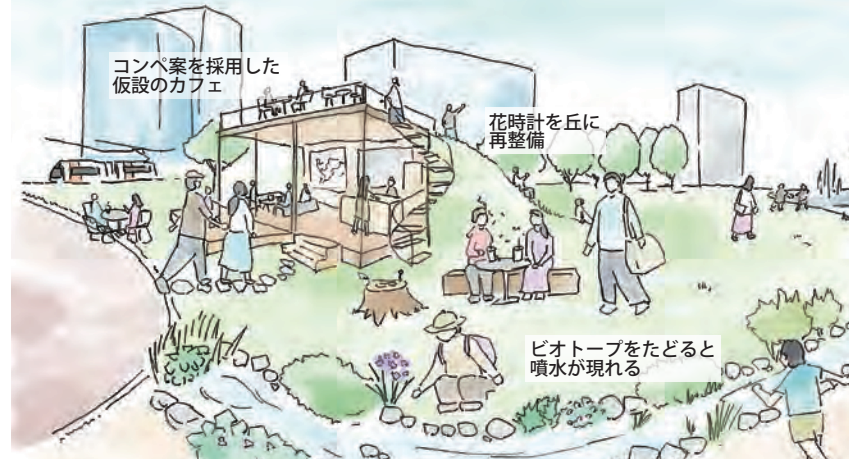
みんなの畑 (視点①)

おどり場の一部をみんなの畑として開放する。TYMとJAが連携して月1回WSを開催し、参加者は畑のつくり方などを学ぶことができる。訪れた人は誰でも水をあげることができ、堆肥には近隣飲食店の生ゴミを活用する。野菜の収穫イベント時には公園内で調理して食べることもできる。



変化し続けるカフェ (視点②)

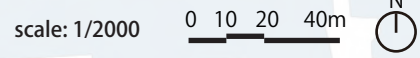
LRTの電停に面した公園の入口にカフェを整備する。地元企業がスポンサーとなりデザインコンペを毎年開催し、優秀提案は仮設のカフェとして整備される。学生やデザインを仕事とする人だけでなく、周辺企業に勤めている人や県外の人も参加でき、公園内で開催する最終審査会は1大イベントとなる。



LRTの車内から見えて気になり寄ってみたカフェ。屋上に上がるとそのまま芝生につながっていて気持ちいい。毎年建物が変わるらしいから、次来る時が楽しみだな。

富山まつり (視点③)

年に1度の富山まつりでは県庁前にステージが仮設され、県庁入口のスロープ部分のデッキ、公園内のWSで製作されたファニチャーが観客席として利用される。WSで製作した屋台では畑の野菜も販売され、公園全体がおどり場となる。



県庁でライブビューイング (視点④)



TYMセンター

協議会の開催だけでなく、訪れた人がおどり場でやってみたいことを模造紙に貼ったりプレゼンしたりすることができる。展示を見たリ縁側で休憩するなど、思い思いに過ごすことができる。



県庁本館

庁舎2階に集約した空室を賃貸して多様な活動ができるおどり場として活用する。また道路・河川等の利活用に関連する課も配置し、TYMとの連携の円滑化を図る。

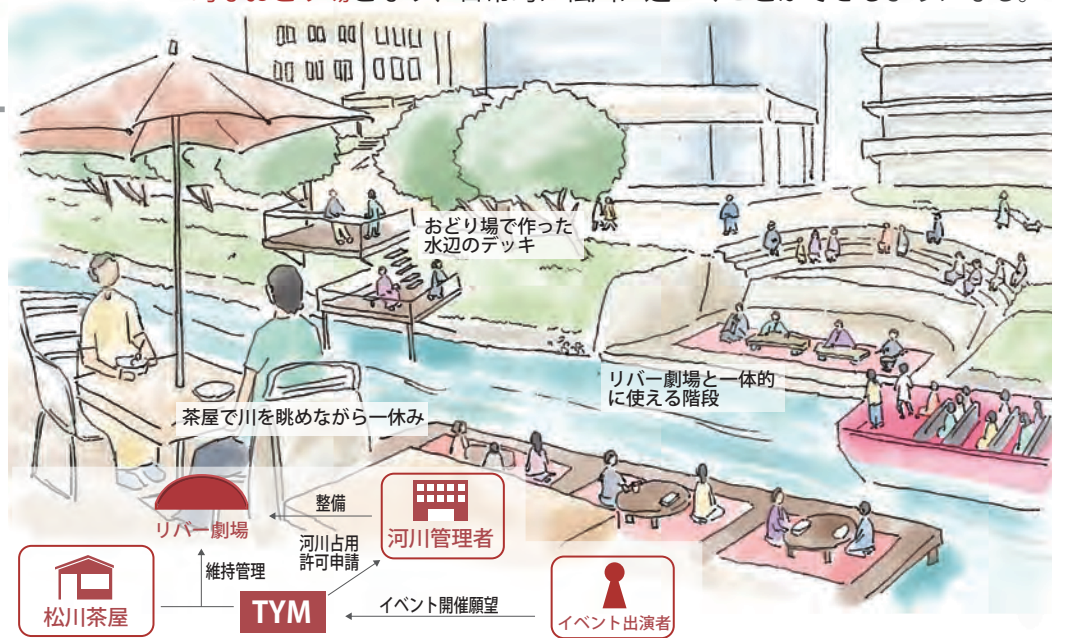


朝ヨガとファニチャーづくり (視点⑤)



水辺のステージ (視点⑥)

松川茶屋対岸にある既存のリバー劇場に、観客席にもなる階段を整備し、橋や道路から水辺へのアクセス性を向上する。松川を挟んで両岸が一体的なおどり場となり、日常的に松川に近づくことができるようになる。

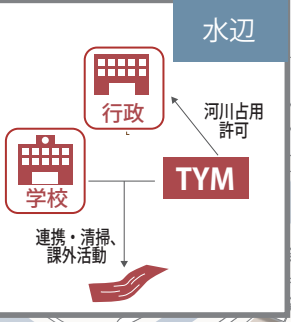


まちなかへの波及

県庁周辺エリアの整備をきっかけにまちなかの低未利用地や道路、水辺などにおどり場が広がっていく。各おどり場では、周辺住民やおどり場に面した飲食店等がプレイヤーとなり、思い思いに活動を行っている。

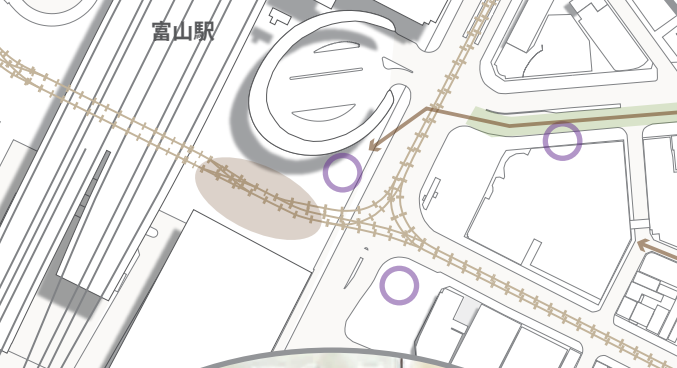
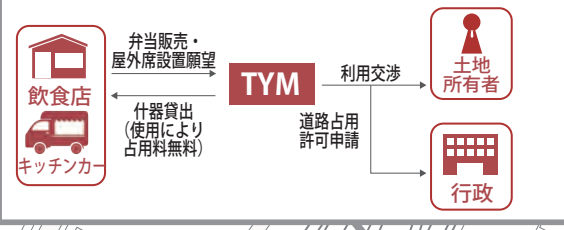
水辺空間 × おどり場

松川の県庁前部分での活動を発端として、松川全域に活動が広がっていく。従来の美化活動だけでなく、学校と連携し、課外活動として定期的な川掃除を行うなど、学習の場にもなる。住宅街の近くの松川では、日常的に川で水遊びをしたり、川沿いを散歩するような行動が生まれる。



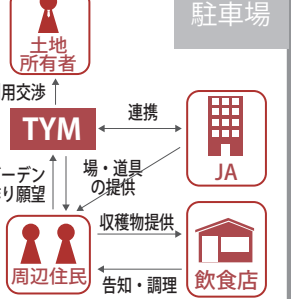
飲食店街 × おどり場

駅 - 県庁間の飲食店街にある駐車場や道路がおどり場となる。昼はキッチンカーの出店場所や周辺飲食店の弁当販売所になり、夜は屋台や屋外席が設置される。



住宅街 × おどり場

住宅街の中にある小規模な駐車場を活用し、ご近所さんとコミュニティガーデンが行われる。採れた作物の一部を近隣のカフェで調理することで、カフェ利用者にもおどり場が知られていく。

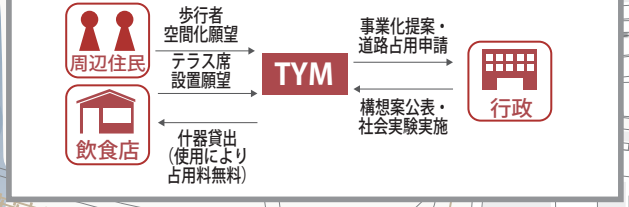


住宅街 × おどり場

昼は周辺住民の憩いの場、夜は隣接居酒屋のテラス席になる。夜には、大人たちがテラス席で飲んでいる中、敷地内で子供が遊んでいるという住宅街独特の風景が見られる。

道路空間 × おどり場

おどり場がまちなかに増えたり、自転車・公共交通利用が増えることで、車需要が減り現在の道路空間に余白が生まれる。そこで、現在もイベント利用のある大手モールや、広幅員の城址大通りの日常的な活用が始まる。道路上にはファニチャーが置かれて憩える空間になったり、沿道飲食店のテラス席が置かれる。休日にはマルシェ等も行われる。



富山の将来像

まちなかの低未利用地を住民一人一人がやりたいことを実現できるおどり場に変えることで、周囲から活動が見えるようになり、新たな人の結びつきが生まれる。その結果、富山のまちはおどり場が求心力を持つようになり、人々の生活の中心となる。また、おどり場を目的地とした細やかな移動が増えることで、回遊性が向上し、まち全体がおどり出していく。これが、私たちの考える県庁周辺、また県庁周辺から広がっていく持続可能な富山の未来の姿です。

モビリティポート × おどり場

起伏がほぼない地形条件から、自転車利用の促進を図る。現在の自転車利用の大半はLRTの環状内に設置されているため、環状外に広がる住宅街にもサイクルポートを設置し、市民の日常的な利用を促す。また、環状線外の駐車場からLRTやレンタサイクルの乗り継ぎの無償化や、おどり場利用者割引のシステムを構築することで、利用促進を図る。

